

# 范成大《臘月村田樂府十首》注釈

附《上元紀吳中節物俳諧體三十二韻》注釈

## 凡例

一、本稿は南宋の政治家・詩人 范成大（一一二六～一一九三）が晩年、蘇州郊外の石湖のほとりに隱棲した折、近郊農村の年末の風俗について詠んだ「臘月村田樂府十首」の注釈である。参考として同じく范成大が同地の正月十五日の元宵節について詠んだ「上元紀吳中節物俳諧體三十二韻」の注釈も併せ附することとした。これらの詩に拠って十二世紀後半の蘇州近郊の農村における年末年始の年中行事や風俗・風物を窺うことができる。

二、底本として富壽蓀 標校『范石湖集』（中国古典文学叢書）（二〇〇六年、上海古籍出版社）〔底本は清・顧嗣立刻本〕を用い、併せて四部叢刊本『石湖居士詩集』（上海涵芬樓藏愛汝堂刊本影印本）及び四庫全書本『宋詩鈔』卷六三（中國哲學電子化計劃影印本）を参照した。

三、「臘月村田樂府十首」の注釈としては、周汝昌『范成大詩選』（中国古典文学読本叢書）（一九九七年、人民文学出版社）及び周錫韞『范成大詩選』（中国歴代詩人選集）（一九八六年、三聯書店香港分店）があり、前者には十首のうち七首、後者には二首の注釈を収める。

四、「上元紀吳中節物俳諧體三十二韻」に関しては、李懿・常先甫・林陽華 評注『宋代民俗詩評注』（二〇一一年、巴蜀書社）に簡単な注釈がある。

五、蘇州近郊や江南の風俗を記録した文献史料として主に次の諸書を参照した（カッコ内は記述された地域名）。

○梁・宗懐『荆楚歲時記』（楚Ⅱ江南地方） ○北宋・孟元老『東京夢華錄』（汴京Ⅱ開封） ○南宋・范成大『吳郡志』（蘇州） ○南宋・周

\* 島 森 哲 男

密『武林旧事』（臨安Ⅱ杭州） ○南宋・吳自牧『夢梁錄』（汴京、杭州） ○清・袁景瀾『吳郡歲華紀麗』（蘇州） ○清・顧祿『清嘉錄』（蘇州）

## 臘月村田樂府十首 并序

余歸石湖、往來田家、得歲暮十事。採其語各賦一詩、以識土風、号村田樂府。  
（以下略）

（余、石湖に帰り、田家に往來して、歲暮十事を得たり。其の語を採りて各々一詩を賦し、以て土風を識して、村田樂府と号す。（\*以下、続けて十詩各々の解説が記されているが、ここではそれぞれの詩の題下に分けて引用することとする。）

○石湖 江蘇省蘇州市の南西郊外にある湖。太湖の支湖で東太湖の奥に位置する。范成大の「四時田園雜興」六十首の序に「淳熙丙午、沈痾少しく紓らぐ。復た石湖の旧院に至り、云々」とあり、一一八六年、六十二歳の范成大が石湖のほとりの別墅に病後の身を寄せたことが分かる。この「村田樂府」もその隱棲後の作と目される。 ○土風 土地の風俗。 ○村田樂府 「樂府」はもと漢の武帝の時に宮中に置かれた音楽を司る役所の名。次いでそこに採集された詩で、音楽に合わせて歌われた詩を指すようになり、また唐以後は転じて樂府の題を借りて作られた律絶でない古詩（擬古樂府）

\* 国語教育講座

を言うようになった。

## 冬春行

其一 冬春行。臘日春米為一歲計。多聚杵臼、尽臘中畢事、藏之土瓦倉中、經年不壞。謂之冬春米。

(其の一、冬春の行。臘日 米を春きて一歳の計を為す。多く杵臼を聚め、尽く臘中に事を畢え、之を土瓦倉中に藏すれば、年を経て壞れず。之を冬春米と謂う。)

臘中儲蓄百事利  
第一先春年計米  
羣呼步碓滿門庭  
運杵成風雷動地  
節勻箕健無舂糠  
百斛只費三日忙  
齊頭円潔箭子長  
隔籬耀日雪生光  
土倉瓦竈分蓋藏  
不蠹不腐常新香  
去年薄収飯不足  
今年頓頓炊白玉  
春耕有種夏有糧  
接到明年秋刈熟  
鄰叟來觀還歎嗟  
貧人一飽不可賒  
官租私債紛如麻  
有米冬春能幾家

臘中儲蓄して 百事利あり  
第一に先ず春く 年計の米  
羣呼して碓に歩み 門庭に滿つ  
杵を運らし風を成して 地を雷動す  
節勻く 箕 健にして 舂糠無し  
百斛只だ費す 三日の忙  
齊頭は円潔 箭子は長く  
籬を隔て日に耀きて 雪 光を生ず  
土倉 瓦竈 分ちて蓋藏すれば  
蠹わず腐らず 常に新香  
去年は収薄く 飯足らざりき  
今年は頓頓 白玉を炊かん  
春耕 種く有り 夏に糧有り  
接到で到らん 明年 秋の刈りいれ熟するに  
鄰叟來り觀て 還た歎嗟す  
貧人は一飽も賒す可からず  
官租 私債 紛として麻の如し  
米有り 冬春くは 能く幾家ぞ

## ●冬春行(冬春のうた)。七言古詩(樂府体)。

○年計米 來年一年間に消費予定の米。 ○羣呼步碓 皆して群がり叫ん

でうすに近づく。 ○節勻箕健 「節」はふるい。「勻」はすっきりふるい

にかける。「箕」はみ。「健」はしつかりとすくう。 ○舂糠 「舂」はくだ

けた米。「糠」はぬか。 ○百斛 一斛は十斗、九四・八八リットル。 ○

齊頭円潔箭子長 「齊頭」「箭子」は米の品種名。「齊頭」は丸い米。「箭子」

は長い米。范成大の「勞畚耨」に「長腰は匏犀のごとく瘦せ／齊頭は珠顆のごとく圓し」。その自注に「長腰米は狭長にして亦た箭子と名づく。齊頭白は圓淨にして珠の如し」。 ○籬 下底が四角で上縁が円いかご。

○土倉瓦竈 土を塗った倉やレンガで壁を固めた穴蔵。 ○蓋藏 貯蔵する。倉庫に蓄え保存する。 ○去年・今年 ここはもう意識が來年に行つ

ていて、十二月時点では本來は今年・明年と言うべきところ。 ○頓 頓 一食ごとに、毎食毎食。「頓」は食事の回数を表す語。杜甫「戯れに俳

諧体を作り悶を遣る二首」に「頓頓黃魚を食らう」。 ○白玉 米のこと。韓愈「城南聯句」に「白玉 香梗を炊く」。 ○春耕有種夏有糧 春耕すの

に時くべき種もみがあり、夏の端境期にもしつかり食糧がある(そうでない年には種まきをした後、秋の收穫までの端境期に食糧が不足することがある)。

○接到明年秋刈熟 「接」はそのまま続いて。何の障礙もなく順調にというニュアンス。「接到」の語、「夏日田園雜興」其の三にも「接

いで到らん 西風熟稻の天」と見える。「明年」は今十二月から見ての明年。「秋刈」は秋の刈入れ。「春耕」に対する「秋刈」。 ○一飽不可賒 わずかに腹を満たすことさえもままならぬ。「一飽」は口腹を満たすこと。一は

ただそれだけのことも、というニュアンス。「賒」は多い、餘すの意。陶淵明「飲酒」其の十に「身を傾けて一飽を嘗まば／少許にして便ち余り有らん」。

○官租私債 「官租」官に納める租税と「私債」家の借金。家が貧しくて借金せざるを得ず、高利貸し等に借りていたのであらう。范成大「夏日田園雜興」其の五に「箋訴す天公 掠剝するを休めよ／半ばは私債を償い半ばは官に輸む」。

十二月中に蓄えておけばすべてがうまくいく。第一にまず來年一年分の米を搗く。皆でいつせいに大声張り上げ碓のまわりに近づき、庭が人でいっぱいになる。杵を振るえば風起り、雷が鳴ったように大地が震える。

ふるいにあまねくかけられ、みでしつかりすくえば、くだけた米もなく、ぬかもない。百斛の米を搗くのに、ただの三日忙しい思いをすれば済む。齊頭米は丸くてつややか、箭子米は長い。かごをのぞけば日に輝いて雪が光を反射しているようだ。土のくらやレンガのあなぐらに分けて貯蔵すれば、虫もわかないし腐りもしない。いつまでもつきたてのいい香り。去年（『今年』は収穫が少なく飯が足りなかった。今年（『来年』）こそは毎食毎食ビカビカの白米を食べるだろう。春に耕すのに蒔くべき種もみがあり、夏の端境期にもしつかり食糧がある。このまま来年の秋が来ればよく成熟した米を収穫できるだろう。隣りの爺さんがやって来て、米つきの様子をみてまたため息をつく。貧乏人はその日その日の腹を満たすことさえままならぬ。お上に納める租税と、たまった家の借金と、乱れた麻のように身に絡みついてどうしようもない。米があつて冬のうちにうすで搗くことのできる家なんて、いったい何軒ありましょう。

## 燈市行

其二 燈市行。風俗尤競上元。一月前已買燈、謂之燈市。價貴者数人聚博、勝則得之。喧盛不減燈市。

（其の二、燈市の行。風俗 尤も上元を競う。一月前 已に燈を買う、之を燈市と謂う。價貴き者は数人聚まり博し、勝てば則ち之を得。喧盛 燈市に減ぜず。）

呉台今古繁華地  
偏愛元宵燈影戲  
春前臘後天好晴  
已向街頭作燈市  
疊玉千絲似鬼工  
剪羅万眼人力窮  
両品争新最先出  
不待三五迎東風  
児郎種麦荷鋤倦

呉台は今古 繁華の地  
偏愛に愛す 元宵の燈影戲  
春前 臘後 天好く晴れ  
已向街頭に向て 燈市を作す  
疊玉千絲 鬼工に似  
剪羅万眼 人力窮まる  
両品 新を争い 最も先に出で  
三五を待たず 東風を迎う  
児郎 麦を種き 鋤を荷うに倦み

偷閒也向城中看  
酒壚博籩雜歌呼  
夜夜長如正月半  
災傷不及什之三  
歲寒民氣如春酣  
農家亦幸荒田少  
始覺城中燈市好

間を偷みて也た城中に向いて看る  
酒壚 博籩 歌呼を雜え  
夜夜長しえに正月半ばの如し  
災傷は什の三に及ばず  
歲寒の民氣 春酣なるが如し  
農家が亦た幸いに荒田少なく  
始めて覺ゆ 城中 燈市好きを

## ●燈市行（燈市のうた）。七言古詩（樂府体）。

○燈市 正月十五日の元宵節に灯す灯籠や提灯を売る市。元宵節の一月前の十二月中から売り出され、市場はにぎわった。○上元 陰暦正月十五日。（七月十五日が中元、十月十五日が下元で、あわせて三元という）。この夜、街中で灯籠に火をともし、さまざまな形をした提灯を持って、夜遅くまで見物して歩いた。○博 賭け事をする。

○呉台 蘇州を指す。○元宵 陰暦正月十五日の元宵節。○燈影戲 影絵芝居。獣の皮や紙をくりぬいて人物などの形にし、後ろから光を当ててスクリーンに映し、物語などを演ずるもの。皮影戲、影戲ともいう。○春前臘後 春前は正月前、臘後は臘日（冬至の後の三度目の戌の日。また旧暦十二月八日）の後。○疊玉千絲 范成大「上元紀吳中節物俳諧体三十二韻」（『范石湖集』卷二三）に「千隙玉虹明らかなり」。その自注に「瑠璃毬燈、一隙毎に一花を映し成す。亦た天下に妙たり」とあり、また「吳中の二燈を詠ず」瑠璃毬（卷二六）に「龍綜冰繭を繰り／魚文玉英を鏤す／雨絲 風外に縐し／雲網 日辺に明らかなり／疊暈 重重に見れ／分光 面面に呈す／間裏の趣きを深くせざれば／争でか箇中の情を識らん」とある。瑠璃球（絹の袋に粟を入れて球状にし、これを固めたうえで、中の粟を抜き取って作った、ガラス玉のような球状のもの）に料絲（瑠璃や紫石英などの粉末にしたものを交えて縐った絲を細かく縦横に巻き付け、その糸の隙間すべてに花などを細かく描き込んだ灯籠。（周如昌『范成大詩選』の注釈による）。○剪羅万眼 「吳中の二燈を詠ず」万眼羅（卷二六）に「弱骨千絲結び／輕毬 万錦の装／綵雲 月魄を籠め／宝氣 星芒を

繞らす／檀点紅嬌小に／梅粧粉細香る／等間に三夕看るも／消費す一年の忙」。范成大同上詩に「万窗花眼密なり」。その自注に「万眼燈は、碎羅の紅白を以て相間えて砌まちべ成す。工夫天下に妙たり。多く万眼に至る。」という。また宋・周密『武林旧事』卷二「燈品」に「羅帛燈の類尤も多く、或いは百花を為し、或いは細眼を為し、間うるに紅白を以てす。万眼羅と号する者、此の種の最も奇なるものなり」とある。無数の細かく切った紅白の絹布（万眼羅）を貼りあわせた灯籠であろう。○三五 十五日の元宵節。○東風 春風。○児郎 青年、若者。○酒壚 飲み屋のカウンター。○博簪 賭博、ばくちのこと。さいころを使うのを博といい、使わないのを簪という。ここは序にいう、値段の高い灯籠を数人が金を出し合って買い求め、誰がもうかを賭けて、当たった、はずれたなどと大騒ぎをしているのであろう。○歌呼 酒場の歌声や賭け事の歓声。○正月半 正月十五日の元宵節。○災傷不及什之三 わざわいや傷害は十分の三にも及ぶまい。灯籠を飾るのは「奉燈」といって「豊登」（豊かな実り）に通ずるので、燈火を掲げれば災いも減るだろうということ。○歳寒 冬の寒い季節。

蘇州は昔も今も繁華の地。何よりも好きなのは元宵節の夜の影絵芝居。正月の前、臘日の後、空はよく晴れ、街頭では早くも元宵節の灯籠を売る市が立つ。豊玉千絲の灯籠は神業かと見まがうほど。剪羅万眼の灯籠は人力を極めたすぐれもの。二種類の灯籠はそれぞれ新奇さを競い、最も先に店先に並べられる。三五、十五の元宵節を待たずに、はやくも春が来たようだ。村の若者たちは麦を種き鋤を荷うのにも飽きて、暇を盗んで街中に出てきて燈市見物。（以下、村の若者のつぶやき）。酒場の歌声、賭け事の歓声。入り混じってなんてにぎやかなんだ。毎晩ずっと元宵節のようだ。これだけ活気があれば、災いだって三分の一以下で済むだろう。寒い季節でも街の人たちのエネルギーは春の真つ盛りのようじゃないか。わが家も幸い田んぼは順調で、街中の燈市がこんなに楽しいとは、生まれて初めて知ったよ。

#### 祭竈詞

其三祭竈詞。臘月二十四夜祀竈。其説謂竈神翌日朝天、白一歳事。故前期持之。

（其の三、竈かまどを祭る詞。臘月二十四の夜竈を祀る。其の説に謂う、竈神翌日天に朝し、一歳の事を白すと。故に期に前んじて之に持る。）

古伝臘月二十四  
竈君朝天欲言事  
雲車風馬小留連  
家有盃盤豐典祀  
猪頭爛熟双魚鮮  
豆沙甘鬆粉餌团  
男兒酌飲女兒避  
酌酒燒錢竈君喜  
婢子鬭爭君莫聞  
猫犬觸穢君莫噴  
送君醉飽登天門  
杓長杓短勿復云  
乞取利市帰来分

古より伝う 臘月二十四  
竈君 天に朝して事を言わんと欲すと  
雲車 風馬 小らく留連せよ  
家に盃盤有り 典祀を豊かにせん  
猪頭は爛熟して 双魚は鮮しく  
豆沙は甘鬆にして 粉餌は团し  
男兒は酌飲して 女兒は避く  
酒を酌ぎ錢を焼けば 竈君喜ぶ  
婢子の鬭爭 君聞く莫れ  
猫犬 穢れに觸るるも 君噴る莫れ  
君の酔い飽きて 天門に登るを送らん  
杓長杓短 復た云う勿れ  
利市を乞い取らば 帰り来りて分けよ

#### ●祭竈詞「竈を祭るうた」。七言古詩（楽府体）。

○竈神 かまどの神。天に上つて人の知られざる罪状を報告するという。唐の段成式『酉陽雜俎』卷一四・諾臯記に「竈神、名は隗。状は美女の如し。又た姓は張、名は単、字は郭。夫人、字は卿忌。六女有り、皆な名は察治。常に月の晦日を以て天に上り、人の罪状を白す。大なる者は紀を奪う。紀は三百日なり。小なる者は算を奪う。算は一百日なり。故に天帝の督使と為り、下りて地精と為る。己丑の日、日出づる卯時、天に上り、禺中（午前十時ごろ）行署に下る。此の日祭れば福を得。」とある。○翌日朝天白一歳事 十二月二十五日に竈神が天に上つてその一家の一年の諸事善悪を天（司命君）に報告する。○前期 十二月二十五日に竈神が天に上る



前後に。

○古伝 東晋の葛洪『抱朴子』内篇・微旨篇に「月晦の夜、竈神亦た天に上り人の罪状を白す。大なる者は紀を奪う。紀は三百日なり。小なる者は算を奪う。算は三日なり。吾亦た未だ此の事の有無を審らかにせず。」云々とあり、東晋の時代からそういう伝承があったことが分かる。 ○竈君

竈の神は夫婦で、男神を竈君、女神を竈夫人という。 ○雲車風馬 神が乗る車や馬。柳宗元「雷に埒り雨を埒る文」に「風馬雲車、肅焉として徘徊す」。ここは竈神の乗り物。実際には雲中を昇る「竈馬」の版画を竈に貼りつけた。『東京夢華録』卷十・十二月の条に「二十四日、交年。都人夜に至り僧道に請うて看経せしめ、酒果を備えて神を送る。合家の替代（かたしろ）と銭紙を焼き、竈馬を竈上に帖り、酒糟を以て竈門に塗抹す。之を醉司命と謂う。夜、床底に於いて点灯す。之を照虚耗と謂う。」○留連

去るにしのびないで、いつまでも居続ける。李白「友人と会宿す」に「滌蕩す千古の愁い／留連す百壺の飲」。 ○盃盤 さかずきや皿。酒や料理。蘇軾「前赤壁の賦」に「穀核已に尽き／杯盤狼藉たり」。 ○豊典祀 「典祀」は祭祀。祭を盛大に行う。 ○猪頭爛熟双魚鮮 豚の頭はじっくり煮込んで柔らかく、二匹の魚は新鮮だ。「爛熟」を底本（清・顧嗣立刻本）は「爛熟」に作るが、爛熟は成語であるので「熟」の字は誤りだろう。 ○豆

沙甘鬆粉餌団 「豆沙」は小豆の餡。「甘鬆」は甘くて柔らかなさま。「粉餌」はだんご。竈神は甘いものが好きという。 ○男兒酌猷女兒避 「酌猷」は酒を酌んで客にすすめること。また楽を設けて神に供えること。『詩経』小雅・瓠葉に「君子酒有り／酌んで之を猷ず」。ここは男の子が竈に酒をすすめる。神事なので女兒は参加できない。 ○酌酒焼銭竈君喜 「酌酒」は酒を地にそそぐこと。「焼銭」は紙銭を焼くこと。いずれも天に帰る竈神の旅路の安全を祈るため。 ○婢子鬬争 はしためたちの喧嘩、言い争い。家の内情が漏れやすい。口から出まかせののしりあいだから、耳をかすなということ。 ○送君醉飽登天門 「醉飽」は竈神がさんざん酔って腹もいっぱいになること。そうして天の門に登るのを見送る。酔って言葉もレロレロになり、甘いもので口もベタベタで、天への報告がまともにできないようにすることをひそかにねらっている。 ○杓長杓短 ひしや

くの柄が長いか短いかなど、どうでもよいことについて言わないでくれ。細かいことを報告しないでほしい。「杓長杓短」は周如昌の『范成大詩選』の注によれば、村民の地方の俗語をまねたのであるという。長短は是非の意。 ○利市 もうけ、利益。

昔からの言い伝えによれば、十二月二十四日の夜、竈の神様が天に上って、その家の罪状を報告をするのだという。その前に竈の神様の乗る雲の車、風の馬よ、まだしばらくはとどまってください。家には酒もあるし御馳走もあります。お祭りも盛大に行います。豚の頭はじっくり煮込んで柔らかく、二匹の魚はぴちぴちと新鮮です。あんこは甘くて柔らかで、団子は白くてまんまるです。男の子はあなた様にお酒を捧げ、女の子は後ろに下がっています。竈の前で酒を地面に注ぎ、紙銭を焼いて旅のご無事を祈ります。竈の神様に喜んでいただけるはずです。はしためたちの悪口雑言には耳をお貸しなさいますな。犬や猫がおしっこを掛けても、どうかお怒りになりませんように。神様がいっぱい飲んで、たらふく食べて、天の門まで登って行かれるのをお見送ります。天へ行かれたら、どうかひしゃくの柄が長いとか短いとか、細かいことは口になさいますな。もうけがあったら、帰られた後、どうぞおすそ分けをお忘れなく。

#### 口数粥行

其四口数粥行。二十五日煮赤豆作糜、暮夜闔家同饗。云能辟瘟氣。雖遠出未歸者亦留貯口分、至襁褓小兒及僮僕皆預。故名口数粥。豆粥本正月望日祭門故事、流伝為此。

（其の四、口数粥の行。二十五日 赤豆を煮て糜を作り、暮夜 闔家 同に饗す。云う能く瘟氣を辟くと。遠く出でて未だ帰らざる者と雖も亦た口分を留め貯え、襁褓の小兒及び僮僕に至るまで皆な預る。故に口数粥と名づく。豆粥は本正月望日に門を祭る故事にして、流伝して此れと為る。）

家家臘月二十五  
家家臘月二十五  
家家臘月二十五  
米を漸いで珠の如く 豆を和して煮る

大約轆鐺分口数  
 疫鬼聞香走無處  
 鍍薑屑桂澆蔗糖  
 滑甘無比勝黃梁  
 全家團欒罷晚飯  
 在遠行人亦留分  
 襌中孩子強教嘗  
 餘波徧沾獲与臧  
 新元叶氣調玉燭  
 天行已過來万福  
 物無疵癘年穀熟  
 長向臘殘分豆粥

大約もて鐺を轆らせ 口数に分つ  
 疫鬼 香を聞きて 走りて處無し  
 鍍薑 屑桂 蔗糖を澆げば  
 滑らかに甘きこと比ひ無く 黄梁に勝る  
 全家 團欒して 晩飯を罷れば  
 遠きにある行人も 亦た分を留む  
 襌中の孩子も 強いて嘗めしめ  
 餘波 徧く獲と臧とに沾す  
 新元の叶氣 玉燭を調え  
 天行已に過ぎて 万福来る  
 物に疵癘無く 年穀熟し  
 長く臘残に向いて 豆粥を分つ

# ●口数粥行(口数粥のうた)。七言古詩(樂府体)。

○口数粥 十二月二十五日に、家族全員、赤ん坊から召使い及び旅行中の者の分まで含めて人数分を作つて共に食べる小豆粥。邪氣を払うという。人数分作るから口数粥という。南宋・呉自牧『夢梁錄』卷六、十二月の条に「二十五日、士庶の家、赤豆の粥を煮て食神を祀る。名づけて人口粥と曰う。猫狗有る者も亦た焉に与る。何の典に出づるかを知らず。」とある。清・顧禄『清嘉録』卷二、十二月、口数粥の条には「二十五日、赤豆を以て米に雜えて粥を作り、大小徧く餐す。外に出る者有るも亦た覆貯して之を待つ。襌襌の小兒、猫犬の属と雖も亦た預る。名づけて口数粥と曰い、以て瘟氣を辟く。或いは豆渣〔おから〕を雜えて之を食う。能く罪過を免る。」と見える。

○者赤豆作糜 「赤豆」はあずき。「糜」はかゆ。なお『荊楚歲時記』には「冬至の日、…赤豆粥を作り、以て疫を禳う」と冬至の日の行事としており、さらに注して「按ずるに共工氏に不才の子有り。冬至を以て死し、疫鬼と為り、赤豆を畏る。故に冬至の日、赤豆粥を作り、以て之を禳う。」とある。○闔家 家族全員。○辟瘟氣 はやりやまいを避ける。○口分 人数分。○正月望日 正月十五日。

○大約轆鐺 大きなおたまで鍋の底をこすように粥を掬い取る。「轆」はこすつて音を立てる。きしらせる。「鐺」はなべ。『漢書』楚元王伝に、漢の高祖が微賤のとき、嫂のところに客を連れて来ることがしばしばあったが、嫂はこれを嫌い、偽つて釜の底をこすつて音を立て、羹の無くなつたことを示して客を追い返した。「嫂、叔の客と与に來たるを厭い、陽りて羹尽きたりと為して釜を轆らす。客故を以て去る。」顔師古の注に「勺を以て釜を轆らせ、声を為さしむるなり。」ここはその表現を使つて鍋の底まで全部掬い取ることを示した。○疫鬼 流行病を起こす悪霊。○聞香 「聞」はにおいを嗅ぐ。○鍍薑屑桂 「鍍薑」は細かく刻んだ生姜。「屑桂」は細かく砕いた肉桂(ニッキ)。○蔗糖 さとうきびの汁。○黄梁 あわの一種。おおあわ。○在遠行人 遠いところにいる旅人。「行人」は旅人。○襌中孩子 おむつをつけた赤ん坊。「襌」は幼児のかいまき。おむつ。○餘波 余りもの。余沢。○獲与臧 おんなのめしつかいととおこのめしつかい。『方言』三に「奴を罵りて臧と曰い、婢を罵りて獲と曰う。」○新元叶氣 新春元旦の和氣。「新元」は正月一日。「叶」はやわらぐ。○調玉燭 四時の氣候が調和する。四時の氣候が調和すれば、万物の光り輝くこと玉の燭の如くなるという。○天行 天の運行。『易』乾の象伝に「天行健なり。君子以て自強して息まず。」○来万福 よろずのさいわいがやつて来る。『史記』河渠書に「宣房塞がれて万福来る。」○疵癘 わざわい。やまい。○臘残 歳末。

どこの家でも十二月二十五日には、真珠のような白い米をといで、小豆を混ぜて炊く。大きなおたまで鍋の底までこすつて、家族みんなの人数分を取り分ける。疫病神はそのお粥の香りをかいで、どこへ逃げたらいいか、慌ててうろうろする。細かく刻んだ生姜や砕いた肉桂、それにさとうきびの汁を混ぜれば、とろりと甘いそのうまさは抜群で、黄梁にもまさる。一家団欒して晩飯を食い終わると、遠くに出かけている旅人の分もまた取り分ける。おむつをした赤ん坊にまで強いてなめさせ、余りは家の召使たち全員におす分け。新春元旦の和氣は、今年一年の天候を調和させ、天の運行が順調に進む以上は、すべての福を招くことができる。ものみなわ

ざわいもなく、穀物は豊かに熟し、ずっと年の暮れまで食事を分け合うことができるだろう。

# 爆竹行

其五爆竹行。此他郡所同、而吳中特盛。惡鬼蓋畏此声。古以歲朝、而吳以二十五夜。

(其の五、爆竹の行。此れ他郡も同じき所にして、吳中特に盛んなり。惡鬼蓋し此の声を畏る。古は歲朝を以てして、吳は二十五夜を以てす。)

歲朝爆竹伝自昔  
吳儂政用前五日  
食残豆粥掃罷塵  
截筒五尺煨以薪  
節間汗流火力透  
健僕取将仍疾走  
兒童却立避其鋒  
当塔擊地雷霆吼  
一声兩声百鬼驚  
三声四声鬼巢傾  
十声百声神道寧  
八方上下皆和平  
却拾焦頭疊牀底  
猶有餘威可驅厲  
屏去藥物添酒杯  
尽日嬉游夜濃睡

歲朝の爆竹は昔自り伝う  
吳儂は政に前五日を用てす  
食残の豆粥 塵を掃い罷り  
筒を截ること五尺 煨るに薪を以てす  
節間 汗流れて 火力透る  
健僕 取り将つや 仍りて疾走す  
兒童 却き立ちて 其の鋒を避く  
塔に当り地に撃てば 雷霆吼ゆ  
一声兩声 百鬼驚き  
三声四声 鬼巢傾く  
十声百声 神道寧く  
八方上下 皆な和平  
却つて焦頭を拾つて 牀底に疊けば  
猶お餘威有りて 厲を驅る可し  
藥物を屏去して 酒杯を添え  
尽日嬉游して 夜は濃睡

## ●爆竹行「爆竹のうた」。七言古詩（樂府体）。

○爆竹 今は火薬を使った爆竹が普通だが、ここはそれ以前の竹筒を火にあぶって爆発させる爆竹。火薬による爆竹は「爆杖」と呼ばれ、みやこ臨安やその周辺でこの時代、普及しはじめていた。南宋末期の吳自牧『夢梁

録』十二月に「又爆杖、成架烟火の類を市る有り」とある。○歲朝 元旦。○二十五夜 十二月二十五日の夜。

○吳儂 吳の地方の人。吳の地方では自分のことを「儂」「我儂」と称し、人を「渠儂」「箇儂」「他儂」と称するなど、人を称して「儂」ということが多い。そこで吳儂は吳人を指す。○政 正に同じ。まさに。○前五日 元旦の前五日、つまり十二月二十五日。○截筒五尺「筒」は竹筒。宋代の五尺は一五三・六センチメートル。○汗流 竹の表皮にあぶらうがにじみ出す。○火力透 竹の節の中にまで火力が透る。○健僕 元氣のいい下僕。○当塔擊地 石の階段のところまで持っていて地面（石の上）に叩きつける。○雷霆 雷も霆もかみなり、いかづち。○百鬼 中国の「鬼」は日本のオニとは異なり、死者の幽霊や人に害悪をもたらす惡靈などの総称。○神道 神祇、神靈、先祖の靈魂などを指す。○牀底 ベッドの下。○驅厲 惡靈の祟りを追い払う。

元旦の爆竹は昔から伝わっている行事だが、吳の人たちはそれをちようど五日前の十二月二十五日に行く。夕食の片づけがすっかり終わってから、竹筒を五尺（二五〇センチほど）の長さに切って、薪の上であぶる。節と節の間にあぶらうがにじんできたら中まで火が透る。それを元氣のいい下僕がさつとつかむや、そのまま大急ぎで走り出す。子供たちはそれを見ると後ずさりしてその竹棒をよける。石段のところであいつと地面に叩きつけると、パンと雷のような音が鳴る。パンパンと鳴ればあらゆる鬼どもがびっくりし、三発四発鳴ると鬼どもの住まいもひっくり返ってしまふ。十発百発鳴れば神様たちは安心し、四方八方、上下もすべて、みな平安。焦げた竹の切れ端を拾ってベッドの下に敷けば、その威力の余勢で疫病神を追い払うことができる。今夜ばかりは薬など飲むのをやめて、もう少し酒を飲もう。今日一日楽しく遊んだことだし、夜はぐっすり眠れるぞ。

## 焼火盆行

其六焼火盆行。爆竹之夕、人家各又於門首燃薪滴盆、無貧富皆爾。謂之相暖熟。



(其の六、焼火盆の行。爆竹の夕、人家各々又た門首に於いて薪を燃やして盆に満つ。貧富と無く皆な爾り。之を相暖熱すと謂う。)

春前五日初更後  
春前五日 初更の後

排門然火如晴昼  
門を排き火を然やして 晴昼の如し

大家薪乾勝豆點  
大家は薪乾きて 豆點に勝り

小家帶葉燒生柴  
小家は葉を帶びて 生柴を燒く

青煙滿城天半白  
青煙 城に滿ちて 天半ば白く

棲鳥驚啼飛格磔  
棲鳥 驚き啼きて 飛ぶこと格磔

兒孫圍坐犬鷄忙  
兒孫 圍坐して 犬鷄は忙し

鄰曲歡笑遙相望  
鄰曲 歡笑して 遙かに相い望む

黃宮氣応纔兩月  
黃宮の氣応じて 纔かに兩月

歲陰猶驕風栗烈  
歲陰 猶お驕りて 風栗烈

將迎陽豔作好春  
陽豔を將迎して好春を作さんとすれば

政要火盆生煖熱  
政に要す 火盆 煖熱を生ずるを

●焼火盆行(焼火盆のうた)。七言古詩(樂府体)。

○焼火盆 家の門の前で薪を高く積み上げ火を燃やし、春を呼ぶ行事。清・顧禄『清嘉録』卷十二、十二月、焼松盆の条に「是の夜(＝十二月二十五日の夜)、郷農の人家、各々門首に於いて松柴を架して井字の形に成し、屋に齊しくし、火を挙げて之を焚く。煙焰天を燭し、爛として霞布(ゆうやけ)の如し。之を焼松盆と謂う。」とある。

○春前五日初更後 十二月二十五日の夜八時過ぎ。 ○排門 門をおし開く。

○大家 大きい家、富貴な家。 ○豆點 まめがら。豆を取った後のくきやから。焚きつけにする。 ○小家 小さい家、貧しい家。 ○帶葉焼生柴 「焼帶葉生柴」の倒装。葉がついたままでの木の枝を燃やす。

○飛格磔 「格磔」は擬声語で鳥がパタパタ飛ぶ様子。 ○圍坐 火を囲んで座る。 ○黃宮氣応纔兩月 「黃宮」は音律の名で黄鐘のこと。六律六呂の基本となる音。陰曆十一月に配す。『礼記』月令に「仲冬の月、其の音は羽、律は黄鐘に中る」。その鄭玄注に「黄鐘は律の始め、…仲冬

の氣至れば、則ち黄鐘の律 応ず」とある。仲冬(十一月)から始まって十二月末までわずかに二カ月。○歳陰猶驕 「歳陰」は年の暮れ。もうじき新春が来るというのに陰の氣がまだがんばっている。○栗烈 冬の寒氣の烈しいさま。『詩經』豳風・七月に「二の日栗烈たり」。○將迎 迎接。むかえる。○陽豔 春を指す。○政 正に同じ。まさに。

新春前の十二月二十五日、午後八時過ぎ。門をおし開き、門の前で火を燃やす。まるで昼間のようにあかあかと明るい。高貴な家ではよく乾いた薪を使うので、豆がらなどいらない。貧しい家では葉のついた生乾きの木の枝などを燃やす。青い煙が街中に広がって、空も半分白くなる。果に戻って寝ていた鳥たちもびつくりして鳴き騒ぎ、パタパタと飛び立つ。子供たちは火を囲んでまわく座り、じつと火を見守る。犬やニワトリは火に驚いて忙しく走り回る。近所の人たちは楽しげに笑いながら遠くから眺めている。仲冬の氣が至り、黄鐘が応じた十一月より、わずかに二月ばかりのこの歳末、新春も目の前というのに、陰の氣はまだがんばっていて、風は肌を刺すように冷たい。春をお迎えして好い新年にしようと思うなら、是非とも火盆の火がポッカポカの熱氣を生ずるようにしなければならぬ。

#### 照田蠶行

其七照田蠶詞。与焼火盆同日。村落則以禿帚若麻點竹枝輩燃火炬、縛長竿之杪以照田。爛然徧野、以祈絲穀。

(其の七、照田蠶の詞。焼火盆と同日なり。村落には則ち禿帚若しくは麻點・竹枝の輩を以て火炬を燃やし、長竿の杪に縛りて以て田を照らす。爛然として野に徧く、以て絲穀を祈る。)

郷村臘月二十五  
郷村 臘月二十五  
長竿然炬照南畝  
長竿 炬を然やして 南畝を照らす  
近似雲開森列星  
近づけば雲開きて 森列せる星の似く  
遠如風起飄流螢  
遠ざかれば風起りて 飄流せる螢の如し  
今春雨電繭絲少  
今春 電雨りて 繭絲少く



秋日雷鳴稻堆小  
農家今夜火最明  
的知新歲田蠶好  
夜闌風焰西復東  
此占最吉餘難同  
不惟桑賤穀凡凡  
仍更芋麻無節菜無蟲

秋日 雷鳴ありて 稻堆小なりき  
農家が 今夜 火最も明らかなり  
的かに知る 新歳は田蠶好からんと  
夜闌にして 風焰 西復た東  
此の占 最も吉にして 餘は同じ難し  
惟に桑賤く 穀凡凡たるのみならず  
仍お更に芋麻に節無く 菜に蟲無からん

●照田蠶行〔照田蠶のうた〕。序文は「照田蠶詞」。七言古詩（樂府体）。

○照田蠶 清・顧禄『清嘉録』卷一二、十二月、照田財の条に「村農、長竿を以て燈を燃やして田間に挿し、秋り有るを祈ると云う。焰高き者は稔る。之を照田財と謂う。」とあり、またその案語に引く『吳江県志』に云う、「郷村の人、田中に就きて長竿を立て、藁篠を用て爆竹を夾みて其の上に縛り、四旁金鼓の声絶えず。初更自り起りて夜半に至るまで、乃ち火を挙げて之を焚き、名づけて焼田財と曰う。黎里屯村に盛んなりと為す。蓋し昔の照田蠶の俗に類すと云う。」○禿帚若麻黠 「禿帚」は使い古したほうき。「麻黠」はおがら、麻の茎。○杪 さき、先端。○爛然 明らかなさま、かがやかしいさま。○析絲穀 養蚕と農耕の成功を祈る。

○炬 たいまつ。かがり火。○南畝 農地。『詩経』豳風・七月に「我が婦子と同じく／彼の南畝に鋤す」。○森列星 森列はつらなりならぶ。星が空一面にずらつと並んでいるようだ。○漂流螢 風に吹かれて螢がふわふわと漂い流れて飛んでいるようだ。○雨雹 「雨」は去声に読んで動詞「ふる」。○秋日雷鳴稻堆小 范成大「秋雷嘆」にも「立秋の雷は万斛を損す／吳儂此れを記して年穀を占う」とあり、その題下の自注に「吳諺に云う、秋季輓〔雷がゴロゴロ鳴る〕すれば万斛を損す、と。立秋の日の雷を謂うなり。」とある。「稻堆」は積み上げた稲のやま。それが小さかったとは、収穫が少なかったということ。○的知 確かに知る。○此占 最吉餘難同 風の中で焰が西に東に揺らめくのは豊作の前兆で、何にもましてめでたいこと。いろいろある占いの中でこれが最も靈驗たしかで、それ以外の占いは同等には扱えない。韓愈の「衡嶽廟に謁して遂に嶽寺に宿

し、門樓に題す」の詩に「手に杯琖〔二枚の半月型の木の札で、投げてその裏表の組み合わせによつて吉凶を占う〕を持ちて我を導いて擲たしむ／云う此れ最も吉にして餘は同じ難し」とあるのに拠る。○桑賤 桑の葉の値段が安い。農家が桑の葉を余所から買い入れていたことは、范成大「曬繭」に「葉貴く蠶飢えて死せんと欲するを危ぶみ／尚お能く包裹す一絲の窠」とあり、同詩の題下の自注にも「俗伝に葉貴ければ即ち蠶熟すと。今歳正に爾り」という、その「葉貴」の表現によつても分かる。○凡凡 「凡凡」は草木が盛んに繁るさま。稲などのよく伸びるさま。『詩経』曹風・下泉に「凡凡たる黍苗／陰雨之を膏す」。○芋麻 からむし。麻の一種。いらくさ科の多年生草本。皮の繊維で布を織る。「節」がなければ長い繊維が取れる。

故郷の村の十二月二十五日。長い竿の先にかがり火をつけて、夜、田んぼをはしからはしまで照らして回る。近づいて見れば、雲が切れて夜空が広がり、そこに星々が一面に並んでピカピカ光っているようだ。遠ざかつて見れば、風が吹いてきて、螢が風に流され漂つてゆらゆら飛んでいるようだ。思えば今年の春は雹が降つて、蚕の収穫がうまくいかず、繭も糸も出来なかった。秋には雷が鳴つて、稲の収穫も乏しかった。しかし今夜のわが家のかがり火はどうだ。村一番の明るさだぞ。だからはっきりと分かるんだ。来年は田んぼも養蚕も絶対うまくいくとね。夜も深まって、風の中で焰が西に東に揺らめいている。これこそ来年の豊収の前兆だ。いろいろある占いの中でもこれがいちばん靈驗あらたかで、それ以外の占いは比較にならぬ。桑の葉が元気に繁つて値段が安く、穀物もすすくと元気に育つぞ。そればかりではない。そのうえさらに、からむしは節なく伸びていい皮が取れるし、野菜にも虫は付かないだろう。

# 分歳詞

其八分歳詞。除夜祭其先竣事、長幼聚飲、祝頌而散。謂之分歳。（其の八、分歳の詞。除夜其の先を祭りて事を竣えれば、長幼聚飲し、祝頌して散ず。之を分歳と謂う。）

質明奉祠今古同  
 呉儂用昏蓋土風  
 礼成廢徹夜未艾  
 飲福之餘即分歲  
 地爐火軟蒼朮香  
 釘盤果餌如蜂房  
 就中脆錫專節物  
 四座齒頰鏘冰霜  
 小兒但喜新年至  
 頭角長成添意氣  
 老翁把盃心茫然  
 增年翻是減吾年  
 荆釵勸酒仍祝願  
 但願尊前且強健  
 君看今歲旧交親  
 大有人無此盃分  
 老翁飲罷笑撚鬚  
 明朝重来醉屠蘇

質明 祠を奉ずるは 今古同じ  
 呉儂 昏を用てするは 蓋し土風なり  
 礼成り 廢徹して 夜未だ艾しからず  
 飲福之餘 即ち分歲す  
 地爐 火軟らかにして 蒼朮香り  
 釘盤の果餌 蜂房の如し  
 就中 脆錫は専ら節物  
 四座の齒頰 冰霜鏘たり  
 小兒は但だ新年の至るを喜び  
 頭角は長成して意氣を添う  
 老翁は盃を把りて心茫然  
 年を増すは翻つて是れ吾が年を減す  
 荆釵は酒を勸めて仍お祝願す  
 但だ願わくは 尊前 且く強健なれ  
 君看よ 今歲 旧交の親  
 大いに人有りや無や 此の盃の分  
 老翁飲み罷り 笑いて鬚を撚る  
 明朝重ねて来らば 屠蘇に酔わん

### ●分歲詞〔分歳のうた〕。七言古詩（樂府体）。

○分歲 年越しの夜に相聚まつて宴を開き、半夜に至つて宴を終え解散すること。半夜を境に新旧の年が分かれるので分歲という。范成大の『呉郡志』卷二風俗にも「除夜祭り畢らば、則ち復た爆竹し、蒼朮及び辟瘟丹を焚く。家人酒を飲み、分歲と名づく。食物に膠牙錫有り。」とある。○祭其先竣事 その先祖を祭つて、それが終わると。竣事は事を終る。○質明 夜明けがた。質はちよūdの意。○奉祠 先祖の祭祀をする。○礼成廢徹 先祖を祭祀する礼が終わると先祖に奉げた礼器や礼物を取り下ろす。礼物は福物（なおりい）として皆でいただくのである。○夜未艾「艾」は久しい。夜未だ艾しからずとはまだ夜が更けていない、夜更けまで時間がある、ということ。○飲福之餘 祭壇から下した酒肉を

福物としていただきおわたら。○蒼朮 藥草の名。おけら。キク科の多年草。『本草』に「之を服すれば、人をして長生辟穀、神仙に到らしむ」とある。○釘盤果餌 「釘盤」は食物を並べる円い皿。「果餌」は甘い菓子や餌の類。「果」はくだものではなく、日本語にも残っている菓子の意。○蜂房 ハチの巣。甘いものが並んで、まるで蜜いっぱいハチの巣のようだとということ。○脆錫 やわらかい鉛。「錫」は糖に同じ。次句の表現から想像すれば、今の冰脆龍鬚糖の類か。白くて細い鬚のような糖は、長寿を象徴するめでたい食べ物として大切にされたのであろう。○節物 二十四節氣などの時節に応じた品物、食べ物。○鏘冰霜 「鏘」は金属や鈴、玉などの鳴る音を表す言葉だが、ここは鉛をサクサク齧る音。それが氷や霜を齧るような音になる。○頭角 子どもが成長して若者として気概や才華が発揮されるようになること。頭角をあらわす。またそういう人。○添意氣 若者らしい気概がそなわる。○荆釵 自分の妻の謙称。後漢の梁鴻の妻 孟光は梁鴻のもとに嫁ぐと「荆釵布裙」いばらのかんざしと木綿のスカートという粗末な身なりで夫に尽くした（列女伝）。そこから「荆釵」は自分の妻の謙称となった。○「但願く此盃分」までの三句は妻の言葉。○尊前且強健 尊は酒樽。牛僧孺の「席上劉夢得に贈る」に「論ずるを休めよ世上昇沈の事／且く闘わさん樽前見〔現〕在の身」。○大有人無 今年ここに集つた「旧交の親」の中で「此の盃の分」（自分の分として責任を以て飲むべき分け前）を飲める人が他にいますか。（あなたがしっかりと飲んでくださいいね。）○明朝重来醉屠蘇 老翁（范成大）の言葉。○屠蘇 正月に飲む藥草をひたした酒。

大晦日の夜明けとともにご先祖をお祭りするのは、昔も今も変わらぬこと。蘇州の人々がそれを夕暮れ時に行うのは、この土地独特の風習だ。位牌の前での祭祀が終わつて、祭壇の上の礼器や礼物を下げると、まだ夜の時間はたっぷりある。祭壇から下した酒肉などの福物をみんなでそろつていただいた後、夜半の「分歲」という段取りだ。囲炉裏の火はやわらかく、藥草の蒼朮の香りが広がる。お皿には甘い菓子や餌が並んで、まるで蜜たっぷりのハチの巣のようだ。とりわけやわらかでサクサクの鉛はこの

時節ならではの食べ物で、囲炉裏の周りのみんなが口にしてサクサクと氷か霜を齧るように音を立てながらあじわう。小さな子どもたちは新年の来るのが楽しみで、ようやく一人前になった若者はいかにもおとならしい気概が加わってきた。老人のわたしはいえ、盃を手にしたまま心は茫然。年が一つ増えれば、我が残りの年もまた減るというわけだ。妻はわたしに酒を勧めて祝いの言葉を述べる。「ただ願わくはお酒を飲んで、とりあえず元気でいてね。ごらんさい。ことし一緒に過ごした古いなじみの親族や親戚のなかで、この盃の酒を代わって飲む人がいますか。これはあなたの飲む分ですから、しっかりと飲んでくださいね。」年寄りのわたしはぐつと飲みほして、笑って髭をひねる。「また明日の朝になれば屠蘇で酔っ払うぞ。」

# 売癡歌詞

其九売癡歌詞。分歳罷、小兒繞街呼叫云、売汝癡、売汝歌。世伝呉人多歌。故兒輩諱之、欲買其餘。益可笑。

(其の九、癡歌を売る詞。分歳罷り、小兒街を繞り呼叫して云う、汝が癡を売らん、汝が歌を売らんと。世に伝う、呉人歌多し。故に兒輩之を諱み、其餘を買わんことを欲す。益ます笑う可し。)

除夕更闌人不睡	除夕 更闌けて 人睡らず
厭禳鈍滯迎新歲	鈍滯を厭禳して 新歲を迎う
小兒呼叫走長街	小兒 呼叫して 長街を走り
云有癡歌召人買	云う 癡歌有り 人の買うを召くと
二物於人誰独無	二物 人に於いて誰か独り無からん
就中呉儂仍有餘	就中 呉儂は仍お餘り有り
巷南巷北売不得	巷南巷北 売り得ず
相逢大笑相揶揄	相逢いて大いに笑ひ 相揶揄す
樛翁塊坐重簾下	樛翁 塊坐す 重簾の下
独要買添令問価	独り買ひ添えんと要して 価を問わしむ
兒云翁買不須錢	兒は云う 翁の買ひは錢を須いず

奉除癡歌千百年 餘り奉らん 癡歌 千百年

●売癡歌詞(癡歌を売るうた)。七言古詩(樂府体)。

○売癡歌 癡は馬鹿、しれもの。歌はおろか、幼少で分別のないこと。「売癡歌」とは、呉の地方には癡歌の人が多く、有り余っているから、その余分な分は売り払ってしまおう、というのである。元の高德基の『平江記事』に「呉人自ら相呼んで歌子と為し、又た之を蘇州歌と謂う。毎歲除夕、羣兒街を繞り呼叫して云う、癡歌を売らん、千貫汝が癡を売らん、万貫汝が歌を売らん、買われるれば儘多く送らん、除らんと要すれば我に随いて来れ、と。蓋し呉人歌多きを以て、兒輩之を戲謔するのみ。」とある。周錫鞞『范成大詩選』(一九八六年、香港三聯書店)によれば、似たような風俗は各地にあり、杭州では「売癡」と称した(南宋・周密『武林旧事』卷三歲晚節物)。広州では「売癡」といい、二十世紀五十年代まではなお流行していたが、近年はすで見えない、という。清・顧禄『清嘉録』卷二、十二月の小年夜大年夜の条によれば「又小兒街を繞りて呼喚して云う、汝が癡を売らん、汝が歌を売らんと。世に伝う、呉人歌多しと。故に兒女の輩戯れに之を売らんと欲すと。今、皆伝わらず。」とあり、清代には既に呉中では廢れていたと見られる。なお「歌」という呼び方については、宋の洪邁の『夷堅乙志』に「江、淮、閩、浙の土俗、各々公諱有り。杭の福兒、蘇の歌子、常の欧爹の如きの類、細民或いは相犯さば、鬪撃に至る」とある。○売汝癡、売汝歌 「汝」が所有格なのか目的格なのか、「汝が癡を売らん」なのか「汝に癡を売らん」なのか未詳。ここは「あなたの馬鹿を(ただで)譲って下さい。僕らが売ってあげます。買ひ手がついたら皆さばいてしまいますから」という内容で所有格に理解しておく。

○厭禳 厭は音「エフ」。はらう。厭禳は巫術等を以て鬼神に祈祷して災いを除くこと。○鈍滯 鈍は遅鈍。滯は呆滯、痴呆。○二物 癡と歌。○揶揄 からかう。『東觀漢記』卷十に「市人皆大笑し、手を挙げて之を揶揄す」とある。○樛翁 樛はくぬぎ。役に立たない無用の木とされる。『莊子』人間世篇に「(匠石) 樛社の樹を見る。：是れ不材の木なり。用う可き所無し。故に能く是の如く之れ寿し。」と。ここは范成大が役立たずの



老人という意味で自分のことを言っている。○塊坐 ひとりぼつねんと坐る。○重簾 二重の簾。つまり家の奥の方にいる。○餘 おぎのる。代金後払いの掛け売り。○千百年 掛け売りの期限が千百年、というのか、癡と獣を千百年分、というのか、よく分からないが、前者で解釈しておく。

大晦日の夜は更けていくが、まだ眠る人はいない。今夜はこれからのろまや間抜けをお祓いして、少し賢くなつてから、新年を迎えるのだ。子どもたちは(余計な馬鹿や阿呆を売ってしまおうと)大声で叫びながら街の大通りを駆け巡る。「馬鹿や阿呆の大売り出し。誰か買う人おらんかねー」。馬鹿と阿呆の二つは人なら誰もきつともっている。なかでもこの呉の街の人々は、自分たちでもいう通り、有り余るほどもつてる。だから子どもたちが街の北から南から、走り回って売り歩いて、一つも売れやしない。そんなわけで子どもどうし道で出会うと、ゲラゲラ笑って、互いを指さしながらからかい合う。役立たずの老人であるわたしは、二重のすだれの奥でぼつねんと坐っている。わたしもともと馬鹿だけど、せっかく子どもたちが売りに来たのだから、ここはひとつ馬鹿を買い足してみるか。『馬鹿ひとついくらだね』と値段を聞かせると、子どもたちが言う。「おじいさんが買うのかい? そんならお金は要らないよ。馬鹿と阿呆のひとつセット。百年払い、千年払いでいいよー。」

### 打灰堆詞<sup>だかいたいし</sup>

其十打灰堆詞。除夜将曉、鶏且鳴。婢獲持杖擊糞壤致詞、以祈利市、謂之打灰堆。此本彭蠡清洪君廟中如願故事。惟吳下至今不廢云。

(其の十、打灰堆の詞。除夜将に曉けんとし、鶏且に鳴かんとす。婢獲杖を持ちて糞壤を撃ちて詞を致し、以て利市を祈る。之を打灰堆と謂う。此れ本 彭蠡清洪君が廟中の如願の故事なり。惟だ吳下のみ今に至るまで廢せずと云う。)

除夜将闌曉星爛

除夜 将に闌ならんとし 曉星爛らかなり

糞掃堆頭打如願  
杖敲灰起飛撲籬  
不嫌灰浼新節衣  
老嫗当前再三祝  
只要我家長富足  
輕舟作商重船婦  
大特引犢鷄哺兒  
野繭可縑麥兩岐  
短衲換著長衫衣  
当年婢子挽不住  
有耳猶能聞我語  
但如我願不汝呼  
一任汝婦彭蠡湖

糞掃堆頭 如願を打つ  
杖もて敲けば灰起こり 飛んで籬を撲つ  
嫌わず 灰の新節の衣を浼すを  
老嫗 前に当り 再三祝り  
ただ要む 我が家の長えに富足ならんことを  
輕舟は商いを作し 重船は帰り  
大特は犢を引き 鷄は兒を哺し  
野繭は縑る可く 麥は兩岐  
短衲は長衫の衣に換えて著んことを  
当年 婢子 挽き住めず  
耳有らば猶お能く我が語を聞け  
但だ我が願いの如くんば 汝を呼ばず  
一に任す 汝の彭蠡湖に帰るを

●打灰堆詞(打灰堆のうた)。七言古詩(樂府体)。

○打灰堆 また「打如願」ともいう。ごみ溜めを杖で叩いて願い事がかなうように祈る行事。○婢獲 はしため、下女。『方言』三に「婢を罵りて獲と曰う。」○糞壤 ごみ溜め。ごみを棄ててうず高くなったところ。詩の二句目の「糞掃堆」に同じ。中村喬『続 中国の年中行事』(一九九〇年、平凡社)によれば、「糞掃とは、廁所の糞尿をかき出して積んである堆肥のこと」という(四三頁)。しかし「糞」を糞尿の義とするのは誤りで、「糞」の原義は『説文』に「糞は棄除なり」とある通り、塵土や穢物を棄除する意味。「掃」も棄てるの意味である(『説文』は「掃」に作り「掃は棄なり」とする)。したがって「糞掃」は塵土や穢物を棄棄したところ、つまり掃き溜め、ごみ溜めの意とすべきである。○利市 もうけ、利得、幸運。○謂之打灰堆 「糞壤を撃つ」のを「灰堆を打つ」ともいうのは、防臭、殺菌、ハエ除け等も兼ねて、糞掃の上に灰が廃棄されているからである。○彭蠡清洪君廟中如願故事 「彭蠡」は彭蠡湖。今の江西省の鄱陽湖。「清洪君廟」は彭蠡湖の水神を祀る廟。「如願」は水神の女婢の名。『録異記』(『太平御覧』卷四七二、卷五〇〇引)に云う、「商人欧明なる者有り。彭沢湖



〔「彭蠡湖」を過るに、車馬の出づる有り。自ら青湖君（「清洪君」と称し、明に要めて家に過らしめ、厚く之に礼して問う、何の須うる所ぞと。人有り明に教う。但だ如願を乞えと。問わるるに及んで此の言を以て答う。青湖君甚だ如願を惜しむも、已むを得ず之を許す。乃ち是れ一少婢なり。青湖君明に語りて曰く、君領取して家に至り、如し物を要めんとすれば、但だ如願に就けば、須うる所皆得られんと。爾より商人或いは求むる所有らば、如願並びに為に即ち得。数年にして遂に大いに富む。後、正旦に至り、如願起くること晩く、商人杖を以て之を打つ。如願頭を以て糞中に鑽入し、漸く没して所を失う。後、商人が家漸く貧し。今、北人正旦の夜、糞掃の辺に立ち、人をして杖を執りて糞堆を打たしめ、以て仮の痛みを答えしむ。又た細縄を以て偶人を繋ぎ、糞掃中に投じて云う、願いの如くなら令めよと。意うに亦た如願の故事を為すのみ。〕また『搜神記』巻四によれば「廬陵の欧明、賈客に従い、道に彭沢湖を経。毎に舟中有る所多少を以て湖中に投じて云う、以て礼と為すと。積むこと数年、後復た過るに、忽ち湖中に大道有るを見る。上に風塵多し。数吏有り、車馬に乗り来りて明を候つ。云う、是れ青洪君要えしむと。須臾にして達す。府舎有るを見る。門下に吏卒あり。明甚だ怖る。吏曰く、怖る可き無し。青洪君君が前後礼有るに感ず。故に君を要う。必ず重く君に遣す者有らんも、君取る勿れ。独り如願を求めんのみと。明既に青洪君に見え、乃ち如願を求む。明を逐いて去らしむ。如願は青洪君の婢なり。明將い帰り、願う所、輒ち得らる。数年にして大いに富む。〕この話の続きを永尾龍造『支那民俗誌』第一卷（一九四〇、支那民俗誌刊行会）の記述によって示せば、「欧明は段々と生活が楽になつて来ると心に驕りが生じて、次第に如願に対する愛情が失せて行つた。さうして或る年の正月のこと、どうした事かいつも早朝から起きて働いて呉れる如願が、此の日に限って朝寝をして起きなかつた。そこで戴欧明は正月早々縁起でもないといつて如願を打つた。すると如願は急に起き上がって、そのまま家を走り出て、後園の塵塚の中に駆け込んで、其のまま姿を消して仕舞つた。（中略）。（欧明は）棒切れを持って来て、塵溜を掻き回したり、其の上を打ったりして百方捜して見たが、遂に其の行方は分からなかつた。呼べども叫べども答へはなかつた。欧明

は尚しきりに「今少し富貴を得させてくれたら、もう決して打つやうなことはしないから出て来てくれ」といひつつ塵塚をたたいたといふ。それから塵溜めの中には如願がかくれて居るといふ云ひ伝へを生じて、後世正月の早朝初鶏の声を聞くと、急いで塵溜のところに行き、棒を持ってその上をたたいて如願の名を呼ぶと、金持になれるといふやうな習慣が出来たのである。」（六四二頁）。

○糞掃堆 糞掃はごみ溜め。堆はそれがうず高くなっているようす。○沍けがす。○只要 ひたすらに祈り求める。○輕舟作商重船帰 小舟で商いをなすというのは街に魚や野菜などを売りに行くのであろう。「重船帰る」とは大きな船が商売等で遠くまで出かけていたのが無事に帰って来るといふことであらう。○大牴引犢鶏哺兒 大きな母牛は子牛を引き連れ、鶏はヒヨコに口移しで餌を与える。○野蘭 野生の蘭。梁の簡文帝「箏の賦」に「東垂の野蘭に異なり／山径の漚絲に非ず」。○麥兩岐 麥の穂が二本合わさつて生える。『後漢書』張堪伝に「（張堪）、漁陽太守に拜せられ、民に耕種を勸め、以て殷富を致す。百姓歌いて曰く、桑枝に附する無く、麥の穂は兩岐。張君政を為し、樂しみ支う可からずと。」○短衲 短いつぎはぎの着物。貧乏人の衣裳。○長衫 裾の長い衣服。金持ちの衣裳。○当年 ことし。○婢子 はしため。如願のことを指す。○挽不住 しっかり引き戻すことができない。「挽」は引き戻す。「不住」はしっかりとできない。○彭蠡湖 江西省の鄱陽湖。如願の元の住処。

除夜の夜も更けて、夜明けの星がきらめくころ、掃き溜めを叩いて如願を打つ。杖ふり上げてバンバン叩けば、灰が舞い起り、まがきに飛ぶ。灰がお正月の晴れ着をよごしてもおかまいなし。ばあさんは掃き溜めの前に立って、くりかえし祈る。「我が家が永遠に金持ちになりますように。小さな船は商売繁盛、大きな船は無事に戻りますように。母さん牛は子牛を引き連れ、鶏は口移しでヒヨコたちに餌を与えますように。野のまゆはい糸を繰れますように。麥の穂は二本合わさつて生えますように。短いぼろ服は裾長の服に着替えられますように。今年はお前さんを引き戻すこ

とはできないけれど、耳があるなら聞いとくれ、わたしの言葉を。わたしの願い通りにしてくれさえすれば、これ以上お前さんと呼んだりしない。お前さんの故郷、彭蠡湖に好きにお帰りよ。止めやしないから。」

右臘月村田楽府十首

## 上元紀吳中節物俳諧體三十二韻

(上元 吳中の節物を紀す俳諧體三十二韻)

○上元 正月十五日の元宵節。街中至る所に無数の灯籠を点して夜通し賑わう灯籠祭の日。 ○紀 しるす。 ○吳中 江蘇省吳県の地。今の蘇州市。 ○節物 四季折々の風物。ここは元宵節の風物。 ○俳諧體 諧諷・諷刺の内容とする遊戯的な詩文のスタイル。杜甫に「戯れに俳諧體を作り悶を遣る二首」の詩がある。宋の陸游『老学庵筆記』巻五に「紹興中、貴人好んで俳諧體の詩及び箋啓を作る。」とある。

斗野豊年屢 とうや ほうねん屢なり

吳台樂事并 こだい らくじなら 吳台 樂事并ぶ

○斗野 斗は微小なる喩え。狭い土地、田野。ここは吳中の狭い土地を指す。 ○吳台 春秋時代、吳王夫差が築いた姑蘇台。また姑胥台ともいう。今の蘇州靈巖山にあった。ここでは広く吳の地を指す。 ○樂事并 心を楽しませることが様々にある。

吳の地は毎年、豊年続き。吳台にあふれる賞心樂事。

酒壚先疊鼓 しゅろ ますこ 酒壚 先ず鼓を疊ね

【自注】 歳後即旗亭先擊鼓不已、以迎節意。

歳後は即ち旗亭 先ず鼓を撃ちて已まず、以て節を迎うるの意なり。

燈市蚤投瓊 とうし づとけい 燈市 蚤に瓊を投ず

【自注】 臘月即有燈市。珍奇者、数人醸買之、相与呼盧、采勝者得燈。

臘月には即ち燈市有り。珍奇なる者は、数人醸して之を買い、相与に呼盧し、勝ちを采る者燈を得。

○酒壚 酒場のカウンター。 ○疊鼓 太鼓を小刻みに速く撃つ。謝朓「鼓吹曲」(「文選」卷二八)に「鼓を疊ねて華輶を送る」。李善注に「小しく鼓を撃つ、之を疊と謂う」。 ○歳後 歳が明けた後。 ○旗亭 居酒屋。酒屋は青い旗をしるしに掲げているのでそういう。 ○燈市 灯籠祭。元宵節の夜、街中に灯籠を灯して祝う。 ○蚤投瓊 蚤は早に同じ。投瓊はさいころを投げる。博奕をする。珍しい灯籠は値段が高いので、数人で金を出し合って買い、かけをして勝った者がそれを手に入れるのである。「臘月村田楽府」其二「燈市行」にも「酒壚 博奕 歌呼を雑え／夜夜長しえに正月半ばの如し」とある。「博奕」も自注の「呼盧」もかけ、博奕の意。

酒場でドロドロ太鼓を撃ち(自注に云う、歳が明けたら酒場で先ず太鼓を果てしなく撃って元宵節を迎える意を表す)、灯籠祭が始まると、さっそく賽投げ競い合う(自注に云う、正月一日の元宵節用の灯籠を売り出す市が十二月中に立つ。珍しい灯籠は「値段が高いので」数人で金を出し合って買い、かけをして勝った者がそれを手に入れる)。

価喜膏油賤 あたい こうゆ 賤きを喜び 祥占雨雪晴 しやう しょう 祥は雨雪の晴るるを占う

○膏油賤 膏油は燈火用の油。賤は値段が安い。 ○祥占雨雪晴 元宵節に占ったら「雨雪晴る」という結果。これは今年が豊作だという予兆。

油の値段が安くてよかった。雨雪晴れたら今年は豊年。

簀簰仙子洞 うんとう せんし 簀簰 仙子の洞

【自注】 坊巷燈以連枝竹縛成洞門、多処数十重。

坊巷の燈は枝を連ねたる竹を以て縛りて洞門を成し、多き処は数十重

なり。

菌菰化人城 かんたん 化人の城

【自注】 蓮花燈最多。

蓮花燈 最も多し

○簀簀仙子洞 簀簀は簀簀竹。節と節の間が長く、丈の高い竹。ここは広く竹を指す。仙子洞は仙人の住む洞窟。竹のトンネルに無数の燈火が灯っていて仙境のようだ。○菌菰化人城 菌菰は蓮の花のつぼみ。化人は仏教で仏や菩薩が化生して人の姿に変じ衆生を済度するもの。また道教では仙人を指す。蓮の花の燈火が連なって仏様の世界のようにだ。

竹のトンネルに燈火は連なりあたかも仙人の洞窟。蓮の花のつぼみの提灯は連なりまるで極楽。

檣炬疑龍見 しやうきょ 龍の見えるかと疑い

【自注】 舟人接竹桅檣之表置一燈、望之如星。  
舟人は竹を桅檣の表に接ぎて一燈を置く、之を望むに星の如し。

橋星訝鵲成 きやうせい 鵲の成るかと思ふ

【自注】 橋燈。

橋燈なり。

○檣炬 マストの上に竹を繋ぎ、その先に明かりを置く。○疑龍見 舟が水上を移動するのでマストの先の灯りが横に移動して龍が飛んでいるように見える。○橋星 橋桁に柱を立て、横木でつないで、一面に燈火を吊るすもの。清・顧禄『清嘉録』卷一、一月、燈節の条に「橋梁に木桅を植て、竹架を置きて塔の形の如し。層を逐いて燈を其の上に張る。河神廟に沿いて亦た竿を植て、索を引きて燈を懸く。造橋燈と云う。皆以て禳祓す。」とある。○訝鵲成 天の川にかかるカササギの橋が出来たかといぶかる。

舟のマストの上の竹に吊るされた灯りは夜空に龍が現れたかと疑い、橋の

灯りは天の川にかかるカササギの橋が出来たかと訝るほど。

小家彫獨踞 しょうか 彫 獨り踞り

【自注】 犬燈。

犬燈なり。

高閑鹿雙擗 こうかん 鹿 雙び擗う

【自注】 鹿燈。

鹿燈なり。

○小家彫獨踞 彫は彫に同じ。むくいぬ。小さな(貧しい)家では門口に犬の提灯がぼつんとうづくまるように灯る。○高閑鹿雙擗 高閑は立派な門。高貴の家を指す。高貴の家では鹿の灯籠が門の両脇に並ぶ。鹿は縁に通じて縁起がよい。擗はささえる。「擗門戸」門戸を擗えるという言い方があり、家業を維持することを言う。

小さな家では犬の提灯がひとつ、ぼつんとうづくまるようにともされ、高貴の家は大きな鹿の灯籠が門の両脇にでんと置かれる。

屏展耀雲母 へいけん 耀雲母

【自注】 琉璃屏風。

琉璃の屏風なり。

簾垂晃水精 すだれた 簾垂れて水精晃かなり

【自注】 琉璃簾。

琉璃の簾なり。

○屏展耀雲母 琉璃(ガラス)の屏風が開かれて、灯籠の灯りが映り、屏風の雲母がきらきら輝く。○簾垂晃水精 琉璃の簾が垂れて、そこに水晶燈が掛けられ、明るく輝いている。

琉璃の屏風開いて雲母は輝き、琉璃の簾は垂れて水晶燈はきらめく。

萬窗花眼密 まんそう 花眼密に

【自注】 萬眼燈、以碎羅紅白相間砌成。工夫妙天下。多至萬眼。

萬眼燈は、碎羅の紅白を以て相間えて砌ね成す。工夫天下に妙たり。多く萬眼に到る。

千隙玉虹明 千隙 玉虹明かなり

【自注】 琉璃毬燈は、一隙毎に一花を映し成す。亦妙天下。

琉璃毬燈は、一隙毎に一花を映し成す。亦天下に妙たり。

○萬窗花眼密 萬眼燈という名の灯籠のようす。范成大「呉中の二燈を詠ず」万眼羅（卷二六）に「弱骨 千絲結び／輕毬 万錦の装／綵雲 月魄を籠め／宝氣 星芒を繞らす／檀点 紅嬌小に／梅粧 粉細香る／等間に三夕看るも／消費す一年の忙」。同じく范成大「臘月村田樂府」其の二「燈市行」（卷三〇）に「剪羅万眼 人力窮む」。また南宋・周密「武林旧事」卷二「燈品」に「羅帛燈の類尤も多く、或いは百花を為し、或いは細眼を為し、問うるに紅白を以てす。万眼羅と号する者、此の種の最も奇なるものなり」とある。無数の細かく切った紅白の絹布（万眼羅）を貼りあわせた灯籠であろう。○千隙玉虹明 琉璃毬燈という名の灯籠のようす。范成大「呉中の二燈を詠ず」琉璃毬（卷二六）に「龍綜 冰繭を繰り／魚文 玉英を鏤す／雨絲 風外に縹し／雲網 日辺に明らかなり／疊暈 重重に見れ／分光 面面に呈す／間裏の趣きを深くせざれば／争でか箇中の情を識らん」。また范成大「臘月村田樂府」其の二「燈市行」（卷三〇）に「置玉千絲 鬼工に似る」とある。琉璃球（絹の袋に粟を入れて球状にし、これを固めたうえで、中の粟を抜き取って作った、ガラス玉のような球状のもの）に料絲（瑪瑙や紫石英などの粉末にしたものを交えて搓った絲）を細かく縦横に巻き付け、その糸の隙間すべてに花などを細かく描き込んだ灯籠（周如昌『范成大詩選』の注釈による）。

萬眼燈は細かな花の眼がびつしりと連なり、琉璃毬燈は無数の糸の隙間から玉の虹が浮かび上がる。

舊丹房挂 丹房挂かり

【自注】 梔子燈。

梔子燈なり。

葡萄緑蔓縈 葡萄 緑蔓縈る

【自注】 葡萄燈。

葡萄燈なり。

○舊丹房挂 舊葡萄はクチナシ。丹房はクチナシの赤い実。クチナシの実を象った「梔子燈」は酒樓・妓館の門前に点された。○葡萄緑蔓縈 葡萄はブドウ。緑蔓はみどりのつる。縈はからみつく。

くちなしの灯籠は赤い実のようにぶら下がり、ぶどうの灯籠はみどりのつるがからみつく。

方縑繡史冊 方縑 史冊を繡き

【自注】 生絹糊大方燈、図画史冊故事。村人喜看。

生絹もて大方燈を糊し、史冊の故事を図画す。村人喜び看る。

圓魄綴門衡 圓魄 門衡に綴る

【自注】 月燈。

月燈なり。

○方縑 大きな四角い灯籠に張り付けた絹の布。縑はかとりぎぬ。搓り合わせた糸で堅く織った絹。○繡史冊 繡は絵解きをする。史冊は歴史書。歴史書に書かれた物語を絵にするのである。○圓魄 月を指す。○綴門衡 門衡は門柱の上に渡した横木。綴は門衡にぶら下げる。

大方燈の四角い絹布に史書の物語を描き、月燈を門柱の横木に下げる。

擲燭騰空穩 燭を擲てば 空に騰りて穩やかに

【自注】 小毬燈、時擲空中。

小毬燈、時に空中に擲つ。

推毬滾地輕 毬を推せば 地を滾りて輕やかかなり

【自注】 大滾毬燈。

大滾毬燈なり。



○擲燭 小毬燈（小さな球形の灯籠）を空中に放つ。 ○推毬 大滾毬燈（大きな地面を転がる球形の灯籠）を推す。 ○滾地輕 滾は転がる、転がす。

小さな球形の灯籠を空中に放てば、空にゆっくり昇っていく。大きな球形の灯籠を地上に転がせば、軽やかにくるくる回る。

映光魚隱見 光を映じて 魚 隱見し

【自注】 琉璃壺瓶貯水養魚、以燈映之。

琉璃の壺瓶に水を貯えて魚を養い、燈を以て之を映す。

転影騎縦横 影を転じて 騎 縦横たり

【自注】 馬騎燈。

馬騎燈なり。

○映光魚隱見 ガラスの容器に水を入れ、魚を泳がせて、燈火の光を当てると中の魚が見え隠れする。 ○転影騎縦横 馬騎燈（走馬燈）が回って騎馬の影が縦横に動き回る。清・顧禄『清嘉録』に引く明・王鏊『姑蘇志』に「或いは剪纸の人馬を傍らに懸け、火を以て運り動かすを走馬燈と曰う。」とある。

ガラスの容器の中の魚が、光の中で泳いで見え隠れし、走馬燈が回って騎馬の影が縦横に走り回る。

# 【以上、灯籠の数々】

輕薄行歌過 輕薄にして 行歌過ぎ

顛狂社舞呈 顛狂にして 社舞呈す

【自注】 民間鼓樂謂之社火、不可悉記、大抵以滑稽取笑。

民間の鼓樂、之を社火と謂う。悉くは記す可からず。大抵滑稽を以て笑を取る。

○輕薄行歌過 輕薄は軽々しく落ち着きがないさま。ここは民間の鼓樂の滑稽な様子をいう。行歌は歩きながら歌う。 ○顛狂社舞呈 顛

狂は気が狂ったようなさま。社舞は土地神に奉納する神樂の舞。それが神が降りたようなエクスタシー状態で舞い踊る。なお「輕薄」「顛狂」の語は杜甫「絶句漫興九首」其の五に「顛狂の柳絮は風に随いて舞い／輕薄の桃花は水を逐いて流る」とあるのによる。

道を行進しながら軽やかで滑稽な歌を歌う人。狂ったように舞い踊る社の神樂の舞。（みんなの笑いを誘う。）

村田蓑笠野 村田 蓑笠野にして

【自注】 村田樂。

村田樂なり。

街市管弦清 街市 管弦清し

【自注】 街市細樂。

街市の細樂なり。

○村田蓑笠野 村田はいなか。ここはいなかの素朴な音樂。蓑笠はみのかさ。農民を指す。野は形容詞でいなからしくひなびたようす。 ○街市細樂 都会風の清らかで繊細な樂の音。

田舎の音樂は蓑笠つけた農民が素朴に歌い、都会の音樂は管樂器・弦樂器で奏でる清らかで繊細な樂の音。

里巷分題句 里巷 題句を分かち

【自注】 每里門作長燈、題好句其上。

里門毎に長燈を作り、好句を其の上に題す。

官曹別扁門 官曹 扁門を別す

【自注】 官府名額、多以絹或琉璃照映。

官府の名額は、多く絹或いは琉璃を以て照映す。

○里巷分題句 街の通りでは門の両脇に長い灯籠を掛け、好い詩句を書き付ける。 ○官曹別扁門 役所の建物は門の扁額を、絹あるいはガラスの灯籠で特別にあつらえ、ライトアップする。

街の通りでは門の両脇に長い灯籠を掛け、いい詩句を書き付ける。役所の建物では門の扁額を絹あるいはガラスの灯籠で別にあつらえ、ライトアップする。

早船遙似泛 早船 遙かにして泛ぶに似

【目注】 夾道陸行為競渡之樂、謂之划早船。

道を夾んで陸行し、競渡の楽しみを為す、之を划早船と謂う。

水傀儡近如生 水傀儡 近づけば生くるが如し

【目注】 水戲照以燈。

水戲は照らすに燈を以てす。

○早船 跑早船。「早船」は陸上を行く船の意。「高粱、木又は竹を以て骨組とし、これに更紗などを張って長さ一間ばかりの「底のない」船の形を作ったもので、一人の男がこの船の中に入り、紐を以て肩から吊り、船体は腰のあたりにあるのである。其の男が歩くに従って船も動くので跑早船の名があるのである。」（永尾龍造『支那民俗誌』第二卷四一五頁）。自注の「競渡」はボートレース。「划早船」は早船を漕ぐ。○水傀儡 水傀儡。水上で演ずる操り人形。（ベトナムの水上人形劇ムアゾイヌオックの如きものであろう）。『東京夢華録』卷七に「水傀儡」として見える。云う「一小船有り、上に小綵楼を結ぶ。下に三小門有り。傀儡棚（人形劇の舞台）の如し。水中の楽船に正対す。上に参軍色あり進んで語を致し樂作る。綵棚の中門開き、小木偶人出ず。小船子上、一白衣の人有り、釣を垂る。後に小童有り、棹を挙げて船を划ぎ、遶遶すること数回、語を作し樂作る。活小魚一枚を釣り出す。又樂を作して小船棚に入る。繼いで木偶の築毬（ホッケー）・舞旋の類有り。亦た各々致語を念じ唱和して樂作る。之を水傀儡と謂う。」と。

跑早船は遠くから見れば水に浮かんでいるようで、水上人形は近くで見るとまるで生きているようだ。

鉗緒装牢戸

鉗緒 牢戸に装し

【目注】 獄燈。

獄燈なり。

嘲嗤絵楽棚

嘲嗤 楽棚に絵く

【目注】 山棚多画一時可嘲諧之人。

山棚には多く一時嘲諧す可きの人を画く。

○鉗緒 古代の刑法で、鉗は鉄の鎖でくびかせをはめる、緒は罪人に赤土色の衣を着せること。○牢戸 監獄、獄舎。○嘲嗤絵楽棚 嘲嗤はあざけりわらう。楽棚は歌舞や雑劇を演ずる舞台。『東京夢華録』卷六、元宵の条に「燈山より宣徳門に至る樓横大街約百余丈、…内に楽棚を設け、衙前樂人を差して樂・雜戲を作し、并せて左右軍の百戲其の中に在り」云々とある。

獄舎には首枷や罪人の赤い服を描いた灯籠を掲げ、音楽や雑戲の舞台にはその当時、誇りや嘲笑の対象となっている話題の人物の絵を描く。

堵観瑤席隘

堵観 瑤席隘く

喝道綺叢爭

喝道 綺叢爭う

○堵観 見物の人々がびつしり垣根のように並んでいるようす。○瑤席隘 瑤席は華麗な宴席、酒席。入出が多く混みあっている、官員など身分の高い人々の宴席も十分なスペースが取れない。○喝道 役人が出行するとき、行列の前で「道を開けよ、道を開けよ」と大声でふれること。○綺叢爭 綺叢は綺羅叢。富貴の人々の集まる場所。混みあっている、道を譲れ譲らぬで小競り合いになる。

人出多く、かきねのような列をなし、貴人の宴席も今宵は手狭。お役人のお出ましで、下がれ下がれと叫んでも、富貴の人のいる場所では、威光もまるで形無しで、いさかいごともおこるほど。

禁鑰通三鼓

禁鑰 三鼓を通じ

婦鞭任五更

婦鞭きべん 五更ごこうに任す

○禁鑰通三鼓 禁鑰は宮門のかぎ。ここでは宮廷の門禁（夜間外出禁止）を指す。唐代の長安では日没とともに各坊（市内の各ブロック）の門及び東西の市場の門は閉ざされ、市民の夜間外出が禁止されていたが、唐末から市制の崩壊につれて夜禁も弛み、宋代になると商業に対する空間・時間の制限は除かれ、夜市、すなわち市場の夜間営業も広がっていた（加藤繁「宋代に於ける都市の発達に就いて」〔『支那經濟史考証』上〕、入矢義高・梅原郁 訳注『東京夢華錄』卷二、州橋の夜市の条の注などを参照）。そういう中でも特に元宵節の前後数日間は夜禁は全く無く、深窓の女性たちさえこの夜ばかりは遅くまで自由に外を往来できた。三鼓は三更、すなわち深夜十二時。○婦鞭任五更 婦鞭すなわち帰宅時間は五更すなわち午前四時ごろまでになっても自由に許されていた。

この夜ばかりは夜禁もなく、真夜中にさえ通行自由。夜明けに帰るもお構いなし。

【以上、街路のにぎわい】

桑蠶春繭勸

桑蠶そうさん 春繭しゅんけん勸め

【自注】 春繭自臘月即入食次、所以為蠶事之兆。

春繭は臘月自り即ち食次に入る、蠶事の兆を為す所以なり。

花蝶夜蛾迎

花蝶かちょう 夜蛾やがむか迎う

【自注】 大白蛾花、無貴賤悉戴之。亦以迎春物也。

大白蛾花は、貴賤と無く悉く之を戴す。亦た以て春を迎うるの物なり。

○桑蠶春繭勸 桑蠶は桑を摘み蚕を飼う、養蚕。春繭は春のまゆ。ここは食品名で今の春巻のようなもの。具の中にめでたい言葉を記したおみくじのようなものをはさみ、養蚕の吉凶を占う。『開元天寶遺事』天寶下「探官」の条には「都中、正月十五日に至る毎に麴繭を作り、官位を以て子（中に入れる具材）に貼り、官位の高下を卜い、或いは筵宴を

賭して、以て戲笑を為す。」とあるのは古い例であり、南宋の楊万里に「上元の夜、里俗、粉米もて繭絲を為り、吉語を書きて其の中に置き、以て一歳の福禍を占う。之を繭卜と謂う。因りて戯れに長句を作る」と題する詩（『誠齋集』卷五）があり、「児女玉を炊きて繭絲を作り／中に吉語を蔵して黙して祈る有り／小児は身の官を取ること早きを祝り／小女は只だ蠶事の好きを求む」などとあるのは同時代の例である。『夢梁錄』卷一六、葷素從食店の条に市食点心として「米薄皮春繭」「子母春繭」「活糖沙餠諸色春繭」などが見える。○花蝶夜蛾迎 花蝶・夜蛾はいずれも女性が髪に挿すかんざし。（元宵節の夜は人ごみでこった返すため、翌朝、かんざしがたくさん道路に落ちていたという。）

養蚕は春繭（春巻）の中のおみくじが出来具合を占う。女性たちは花蝶や夜蛾のかんざしを挿して夜の街に繰り出す。（いずれも春を迎える風物詩）。

鳧子描丹筆 鳧子ふしは丹筆たんびつもて描き

【自注】 紅画鴨子相餽遺。

紅もて鴨子に画きて相餽遺す。

鵝毛剪雪英

鵝毛がもうは雪英せつえいに剪る

【自注】 剪鵝毛為雪花、与夜蛾並戴。

鵝毛を剪りて雪花を為し、夜蛾と与に並せ戴く。

○鳧子描丹筆 鳧子はカモの卵。それを赤く塗ったり絵を描いたりして互いに贈り物にする。○鵝毛剪雪英 鵝毛はガチョウの白い羽。それを切つて雪の結晶のような形にし、花かんざしにして髪に挿す。

カモの卵は赤い筆で塗って贈り合い、ガチョウの羽は雪の結晶の形に切り、かんざしにして髪に挿す。

寶糖珍拒妝

寶糖ほうとうは拒妝きよそうよりも珍めづしく

【自注】 鎚拍、吳中謂之寶糖鎚。特為脆美。

鉗拍は、吳中 之を寶糖鉗と謂う。特に脆美為り。

烏賦美飴錫 烏賦は飴錫よりも美し

【自注】 烏賦糖即白錫。俗言能去烏賦。

烏賦糖は即ち白錫なり。俗に言う能く烏賦を去ると。

○寶糖 蘇州地方で寶糖鉗というあめ。脆美、やわらかくてうまいと自注に云う。○柜枚 もち米の粉に麵粉を混ぜ、はちみつを加えて環状にし、油で煎ったかりんとう風の菓子。『楚辭』招魂に「柜枚蜜餌 餽餽有り」。○烏賦 烏賦糖。白い錫。烏賦は油污れのこと。この糖が俗によくあぶらの汚れを取るといいうので烏賦糖と呼ばれる。○飴錫 飴糖、麦芽糖の類。

宝糖は柜枚「かりんとう風の菓子」よりも珍味で、烏賦糖はかた飴よりも美味。(いづれも元宵節ごろの風味)。

撚粉团欒意 粉を撚れば团欒の意

【自注】 糰子。

团子なり。

熬桴膺膊声 桴を熬れば膺膊の声

【自注】 炒糯穀以下、俗名李婁、北人号糯米花。

糯穀を炒りて以てトす。俗に李婁と名づく。北人は糯米花と号す。

○撚粉团欒意 米の粉をこねて团子を作る。いわゆる元宵(ユアンシャオ)。その円いのは一家团欒の意。○熬桴膺膊声 熬桴はもち米のものを煎る。膺膊(ōng)はその爆ぜる音の擬声語。自注に「糯穀を炒りて以てトす」とあり、明・李戒庵「米花」詩に「東のかた呉城に入る十万家／家家穀を爆して年華をトす／鍋に就きて抛下す黄金の粟／手を転ずれば翻り成る白玉花／紅粉の美人は喜子を占い／白頭の老叟は生涯を問う」云々とある。清・顧祿『清嘉録』正月「爆李婁」の条に「郷農、糯穀を以て焦釜に入れ、老幼各々一粒を占う。爆李婁と曰う。流年の休咎をトすと謂う」とある。永尾龍造『支那民俗誌』第二卷五一七頁「爆

糯米花による占」によれば、「元夕に糯米をはぜらせて花のやうになったものに由つて一年の吉凶を占驗する。之を作る方法は糯米を予め水に浸し置き、後取出して蒸し上げたのを日にあてて乾かし、或は円く捏ねて餅のやうな状態にしたり、或は手で搓り散らして細かくし、爆糯米花を作る時の用意をして置くのである。之を米花と謂ふ。元宵の夕になつて之を取出し、竈の大釜の中で、それをはぜらせるのである。…その「はぜて出来た」各花がぞつくりと揃つてふつくらと充満して出来れば、それを好い兆とし、若し反対に餘りはぜらなかつたり、又はぜ砕けたりすれば、不吉の予兆とするのである。」

粉をこねて团子を作る。团欒のシンボル。もち米を煎ればボンボン爆ぜる。その爆ぜた形で一年を占う。

【以上、元宵節の風味など】

筵篲巫志怪 筵篲して巫 怪を志し  
香火婢輪誠 香火して婢 誠を輪す

【自注】 俗謂正月百草靈。故帚葦針箕之属皆卜焉。多婢子之輩為之。

俗に正月百草靈なりと謂う。故に帚・葦・針・箕の属皆トす。多くは婢子の輩之を為す。

○筵篲 筵は小さく折った竹。篲は占う。『楚辭』離騷に「瓊茅と筵とを索りて篲う」。王逸注に「瓊茅は靈草なり。筵は小折竹なり。楚人草を結び竹を折つてトするを篲と謂う」。○巫志怪 巫は巫女。志怪は占いを行つて不思議な話(占いの結果)を語る。○香火 香を焚く。焼香して神に祈る。○婢輪誠 婢たちが誠意を尽くし心を集中して神に祈り、託宣を乞う。○百草靈 清・顧祿『清嘉録』卷一、百草靈に「婦女又た帚姑、針姑、葦姑を召して一歳の吉凶を卜問する者有り。一に百草靈と名づく。郷間には則ち蠶を祈るの祭有り。」とある。

巫女は占いをして不思議な託宣を述べ、はしためは誠を尽して香を焚く。(自注に云う、正月は百草靈(バイツァオリン)といわれ、すべてに靈が宿



る時期だから、ほうき、よし、はり、みなどにやどる神様に祈って、占いをする。多くは家の婢たちがそれを行う。」

箒ト拖裙驗 箒ト 裙を拖いて驗あり

【自注】 弊帚繫裙以下。名掃帚姑。

弊帚に裙を繫ぎて以てトす。掃帚姑と名づく。

箕詩落筆驚 箕詩 筆を落して驚く

【自注】 即古紫姑。今謂之大仙。俗名筭箕姑。

即ち古の紫姑なり。今之を大仙と謂う。俗に筭箕姑と名づく。

○箒ト拖裙驗 箒トは蘇州地方で正月十五日に行われる巫女の占い。使い古した箒に裙（スカート）を穿かせて紫姑神の神像を作り、その動きによつて吉凶を占う。永尾龍造『支那民俗誌』第二卷五三四頁によれば「箒姑といふのは古い箒を持ち出し、それに布を被せて頭とし、箸を挿し、また別に布切れをくくり付けて裙として人形の形にしたもので、これに對してまた願ひ事をしたり、占ひを聞いたりすると、箒姑はひとりで起つたり伏したりして動くのである。」○箕詩落筆驚 箕姑神の占い。北宋・蘇軾「天篆記」（文集卷一二）に「江淮の間、俗鬼を尚び、歳の正月、必ず箕・箒に衣服して子姑神と為し、或いは能く数数として字を画く」とある。陸游「箕卜」詩にも「孟春百草靈なり／古俗紫姑を迎う／厨中竹箕を取り／冒すに婦の裙襦を以てす／豎子夾んで扶持し／筆を挿して其の書くを祝る／俄かに物の憑く有るが若く／對答須臾ならず／豈に必ずしも中否を考えんや／一笑聊か相娛しむ／詩章亦た間ま作り／酒食は須うる所に随う／興闌にして忽ち辞去す／誰か能く其の祛を執らん／箕を持ちて竈婢に昇え／筆を棄てて牆隅に臥せしむ／几席亦た已に撤し／狼藉たり果と蔬と／紛紛として竟に何の益あらん／人鬼均しく一愚」。また南宋末・張世南（鄱陽の人）の『游宦紀聞』卷三に「世南少小時、嘗て親朋の間、紫姑仙に請う有るを見たり。筓を以て筭箕に挿し、灰を桌上に布きて之に画く。能く詩詞を作る者有り。…亦た能く時賦・時論・記跋の類を作る者有り。往往敏にして工み也。禍福を言うも卻つて多く驗あらず。」また永尾龍造『支那民俗誌』第二

卷五三四頁によれば、「箕姑は一枚の箕の真中に箸を一本立てる。その箸には手巾位の広さの布をかぶせ、それを神体と見立て、それに対して神の乗移りを願ふのである。いろいろと呪文を唱へてみると、神がお降りになって箸は自ら動き出すので、それからいろいろのことを聞くと、箸が動いて字を書いたり、人が手を出せばその手を撃つたり、或は米でも舂くやうな風をする。」とある。（日本で昔、流行つた「こっくりさん」や、ヨーロッパの「テーブル・ターニング〔Table-turning〕」の類であろう。）

箒にスカートを穿かせた紫姑神はスカートを引いて靈驗あらたか。箕に立てた箕姑神は筆を動かして詩を書き、みんなびっくり。

微如針属尾 微なるは針の尾を属ぐが如く

【自注】 以針姑卜、伺其尾相属為兆。名針姑。

針姑を以て卜い、其の尾の相属するを伺いて兆と為す。針姑と名づく。

賤及葦分莖 賤なるは葦の莖を分つに及ぶ

【自注】 葦莖分合為卜。名葦姑。

葦莖の分合もて卜を為す。葦姑と名づく。

○微如針属尾 針姑娘を招いての占い。「針の尾を属ぐ」とは二本の針の先がびたりとくっつくことである。永尾龍造『支那民俗誌』第二卷五四九頁によれば、「江蘇省呉県地方では、此の夜〔元宵節の夜〕針の神に女工の上達を祈る風習がある。針の神を鍼姑といふ。…其の神に願立をする為には、二本の針に糸を通し、その頭と頭とを相對せしめ、先の方は全く相反した方向に向けて一直線に置く。さうしてお祈りをして神がお降りになると、其の針はいつの間にか方向を変へて、先と先とが相對してゐるといふことである。」○賤及葦分莖 葦姑娘を招いての占い。葦草を束ねて神体とし、これを招いて一年の吉凶を問う。蘇軾「子姑神記」（文集卷一二）に「予往きて之を觀るに、則ち草木に衣し婦人と為して、筓を手中に置き、二小童子焉を扶く。筓を以て字を画きて曰く、…云々とある。また別に永尾龍造『支那民俗誌』第二卷

五三八頁に紹介されている湖北省応山県地方に伝わる茅草姑娘を招いての占いでは、概略次のような方法で行われる。人の字型に折った茅を、別の茅の上に跨ぐように下げ、その先端に介の字型になるように二本の脚を下げる。これが茅草姑娘の神体。鶏の毛を以てよく摩擦してから、その脚の間を徐々に摩擦する。茅草姑娘に対する唱えごとをしてから、「擦ったり唱へたり何遍か繰り返して、鶏の羽を馬と見立てて、神様をそれに乗せるやうに両脚の間に入れると、両脚は鶏の毛を夾んで、馬に乗ったやうになるのである。その馬に乗ったやうになったのは神様が降って来られたしるしであるから、それから占ひを聞くのである。」云々とある。蘇州の葦姑娘もこれに近いものであったかと想像される。

○「微如…、賤及…」と言うのは、范成大がそれを微賤なこととして貶めていることを示す。

針姑神を招いて占い。二本の針の先と先とがつながればお針が上達する、といった些細なことから、葦姑神を招いての占い。葦の茎を二股に分けて、くつつけば吉、というような卑賤なもので、元宵節の女性たちの占いはさまざま。(実に下らない)。

#### 【以上、元宵節の占い】

末俗難訶止 末俗 訶止し難く  
佳辰且放行 佳辰 且く放行す  
此時紛僕馬 此時 僕馬紛れ  
有客靜柴荆 客有り 柴荆静かなり  
幸甚婦長鋏 幸甚なり 婦らんか長鋏  
居然照短檠 居然 短檠照らす

○末俗 末世の衰退廃頹した風俗。 ○難訶止 しかって止めさせるわけにもいかず。 ○佳辰 上元節(元宵節)を指す。 ○放行 放夜。夜間の通行を許す。元宵節前後はしばらく夜禁の規定を弛める。 ○紛僕馬 下僕や馬が人ごみに紛れて、はぐれるほどのにぎわいだ。 ○有客靜柴荆 そういう世間のにぎわいになじめない異邦人のような自分

は、静かな柴の戸に居場所を求める。 ○婦長鋏 『戦国策』斉策に見える孟嘗君の食客馮援の言葉。孟嘗君の待遇に不満を抱き、「長鋏よ帰らんか」と愛刀に語りかけた。ここはその不満の気分を生かして、元宵節のにぎわいを避け、家に戻ることをいささか大げさに表現した。

○居然照短檠 居然は安らかなさま、落ち着くさま。短檠は小さな灯り。街の灯籠の華やかな輝きと対比する。

末世の風俗はとどめがきかず、元宵節の夜はしばらく通行自由。その晩は人出でこつた返し、下僕や馬ともはぐれるほど。そんな中、にぎわいになじめぬ自分は、静かな柴の戸に帰りたくなる。「長鋏よ帰らんか」と家に戻れば、落ち着いた我が家で小さな灯りを灯すのだ。何と幸せなことか。(私にはこんな小さな灯の方がふさわしい。)

生涯惟病骨 生涯 惟だ病骨  
節物尚鄉情 節物 尚お郷情  
倚撫成俳體 倚撫 俳體を成し  
咨詢逮里毗 咨詢 里毗に逮ぶ  
誰修吳地志 誰か吳地志を修めんに  
聊以助譏評 聊か以て譏評を助けん

○生涯惟病骨 范成大は常に病気がちで、淳熙十年(一一八三)五十八歳の四月末に疾いを得てより、十三年(一一八六)六十一歳の人日立春まで千日間、疾いに臥したこともある。 ○節物 季節の風物。 ○倚撫 一つ一つひろいあげる。曹植「楊徳祖に与うる書」に「文章を詆訶し、利病を倚撫す」。 ○咨詢 問い合わせる。『詩経』小雅・皇皇者華に「載馳馳せ載ち驅り／周く爰に咨詢す」。 ○里毗 いなかの老農。 ○誰修吳地志 将来誰かが吳地志(吳中地方の地方志)を編修することがあったら。のち范成大は『吳郡志』を編修しているが、完成はその死(紹熙四年(一一九三)六十八歳)の二年前であった。この詩を作った頃はまだ出来ていない。 ○助譏評 譏諷(遠回しにそしめる)、評価する

のに助けになるだろう。

私は生涯病気がちであつたが、季節の風物にはやはり郷愁を感じる。そこでそれらを一つ一つ拾いあげて俳諧体でこの詩を作り、土地の年老いた農民たちに見せて意見を聞いた。将来誰かが呉中の地方志を編修することがあつたら、この詩もいささか参考になろう。

右上元紀呉中節物俳諧體三十二韻

## 【参考文献一覧】

- 富壽孫・校『范石湖集』〔中国古典文学叢書〕（二〇〇六年、上海古籍出版社）
- 四部叢刊本『石湖居士詩集』〔上海涵芬樓藏愛汝堂刊本影印本〕
- 四庫全書本『宋詩鈔』卷六三（中國哲學電子化計劃影印本）
- 周汝昌『范成大詩選』〔中国古典文学読本叢書〕（一九九七年、人民文学出版社）
- 周錫麒『范成大詩選』〔中国歴代詩人選集〕（一九八六年、三聯書店香港分店）
- 梁・宗懷（守屋美都雄・訳注）『荆楚歳時記』〔平凡社・東洋文庫〕（一九七八年、平凡社）
- 王毓栄『荆楚歳時記校注』（一九八八年、台湾・文津出版社）
- 宋・孟元老（鄧之誠・注）『東京夢華録注』（一九六一年、商務印書館香港分館）
- 宋・孟元老（入矢義高・梅原郁・訳注）『東京夢華録 宋代の都市と生活』（一九八三年、岩波書店） \* 卷末に静嘉堂文庫蔵元刊本『東京夢華録』影印を附す。
- 『東京夢華録・都城紀勝・西湖老人繁勝録・夢梁録・武林旧事』（一九八二年、中国商業出版社）
- 宋・范成大『吳郡志』〔江蘇地方文獻叢書〕（一九八六年、江蘇古籍出版社）
- 宋・張世南『遊宦紀聞』〔唐宋史料筆記叢刊〕（一九八一年、中華書局）
- 清・袁景瀾『吳郡歳華紀麗』〔江蘇地方文獻叢書〕（一九九八年、江蘇古籍出版社）
- 清・顧禄『清嘉録・桐橋倚棹録』〔歴代史料筆記叢刊〕（二〇〇八年、中華書局）
- 清・顧禄『清嘉録』〔覆清道光刊本〕（天保八年〔一八三七〕、江戸須原屋佐助等刊）〔『和刻本漢籍隨筆集⑪』〕（一九七四年、汲古書院）に影印収載）
- 中村喬・訳注『清嘉録』〔平凡社・東洋文庫〕（一九八八年、平凡社）
- 李懿・常先甫・林陽華・評注『宋代民俗詩評注』（二〇一一年、巴蜀書社）
- 永尾龍造『支那民俗誌』第一卷・第二卷 年中行事篇（一九四〇年、支那民俗誌刊行会）
- 中村喬『中国の年中行事』（一九八八年、平凡社）
- 中村裕一『中国の年中行事』（一九九〇年、平凡社）
- 中村裕一『中国の年中行事』第一冊 春（二〇〇九年、汲古書院）
- 中村裕一『中国の年中行事』第四冊 冬（二〇一一年、汲古書院）

Fan Cheng-da (范成大) 's Ten Songs on Village Life in December (臘月村田樂府十首)  
Annotation and translation

SHIMAMORI Tetsuo

要 旨

南宋の詩人 范成大 (1126 ~ 1193) は晩年、蘇州郊外の石湖のほとりに隠棲した折、「臘月村田樂府十首」、「上元紀吳中節物俳諧體三十二韻」を詠んで蘇州近郊の農村の風俗を描いた。本稿はその注釈である。これらの詩に拠って、12世紀後半の蘇州近郊の農村における年末年始の年中行事や風俗・風物を窺うことができる。

**Key words** : 范成大、臘月村田樂府十首、上元紀吳中節物俳諧體三十二韻、蘇州、民間歳時風俗

(平成29年 9 月29日受理)